中国トイレ事情異聞

則松 彰文：福岡大学人文学部

この４年間における私と本科研との関わりは、少しく希薄なものであった。1995 年～96 年にかけて中国北京に滞在した一年余とその前後の時期における空白が、関わりを些か疎にした一因でもある。そこで、ここでは、現代北京情報の一端をお伝えすることを以て、この場の責を塞ぎたいと思う。

現代中国を旅する日本人の多くが口にするカルチャー・ショックの一つに中国のトイレ事情があろう。「仕切りのないトイレ」が我々日本人に与えるインパクトにはそれなりのものがあるが、実は、それはあくまで旅行者の目に写るトイレ事情に過ぎない。

話はイギリスへと転じるが、周知の如く、１９世紀ロンドンのトイレ事情がかなり深刻であったことは、Ｆ．エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』からも知ることができる。糞尿やゴミが、家々の扉から、あるいは二階の窓から通りや川へと投げ捨てられる様は、中々に想像し難いものがある。「産業革命＝技術革新＝先進」の構図を無前提に信奉する数多の日本人（学生）にとって、１９世紀のロンドンの“黄害”の実態は、俄には信じ難い史実のようである。

翻って、中国の場合はどうであったのか？１８世紀末、乾隆帝治下の清朝中国へ赴いた彼の英国使節マカートニーの日記（『中国訪問使節日記』平凡社、東洋文庫、1975 年）には、杭州の事情について、「しかし、我慢のできないほど街路を不快なものにするのはその悪臭である。毎日朝早く、前の晩からのごみや汚物を十分注意して始末しているにもかかわらず、悪臭はほとんど終日漂いつづけている。」とある。

実は、現代北京の一部地域においては、今も尚この習慣が生き続けているのである。清代から続く北京の旧い街並み「胡同（フートン）」においては、個々の家屋にトイレは無く、狭い通りに面して何カ所かの共同トイレ（公共厠所）があるばかりである。氷点下１０度まで気温の下がる北京の冬において、いちいち戸外の共同トイレまで歩いていくことなど、そう容易なことではない。その結果、朝ともなると昨日（昨晩）分の排泄の“結果”が、狭い通りの側溝に捨てられることになる。ピンク色のトイレットペーパー（中国ではこの色のものが一般的）が糞尿とともに堆積している様は、かなりのインパクトである。一般観光客の眼には触れ得ない胡同での日常風景ではあるが、歪んだ「潔癖症」が幅をきかす現代の日本のこと、この光景を目の当たりにしたなら、間違いなく中国に対する「負」のレッテルが更に何枚か貼り重ねられることになるだろう。

トイレ事情に関する東西の歴史的共通性、現代中国における歴史的慣習の残存等、いずれも誠に興味深い事柄だと思う。